

映画で考える 多様性と共生 / 第8回

『パディントン』授業ガイド

よそ者を受け入れる社会——「ちがいは、いっしょに生きる力になる。」

教員用・指導資料（対象：小学生以上）

本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	よそ者を受け入れる社会（移民・難民の歴史と、迎える側も変わっていく共生）
教材映画	『パディントン』（原題 Paddington／2014年・イギリス／監督・脚本：ポール・キング／原作：マイケル・ボンド）
対象	小学生以上。映倫G。追いかけられる場面など、小さな子どもがこわがる可能性のある場面がある
時間	標準90分（45分×2）。上映95分。全編視聴も可能な長さ
中心概念	移民・難民（首の札とスーツケース）／迎える側の不安と変化／居場所づくり／特集全体のふり返し
ねらい	よそから来た人を受け入れることの意味を考え、迎える側も変わっていく「共生」のイメージを持つ
準備物	児童・生徒用ワークシート（別PDF）／世界地図（ペルーとイギリス）／筆記用具

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠ 移民・難民の話題にふれる際の配慮

心あたたまる作品ですが、**移民・難民**の話題にふれる際には配慮が必要です。

- 外国にルーツのある児童・生徒がいる場合、**特定の子どもに注目が集まらない**ようにする。
- 「かわいそうな人を助ける」話にとどめず、**迎える側も変わる**という視点を大切にする。
- 作者の着想（第二次世界大戦中に避難してきた子どもたち）を紹介する際は、**歴史的事実として簡潔に扱う**。
- 特集の最終回として、これまでの作品とのつながりをふり返る時間をとる。

📄 レイティング・著作権について

- 日本の映倫はG。ただし配信版・ソフトにより表示が異なる場合があるため、使用予定の版をご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 パディントンと「難民」（予備知識）

作者の着想

作者マイケル・ボンドは、パディントンのアイデアの一部が、第二次世界大戦中にロンドンに避難してきたユダヤ人の子どもたちから生まれたと語っています。子どもたちは、名前と住所を書いたラベルを首からさげ、大切な持ち物を小さなスーツケースに入れていたといいます。パディントンの首の札と古いスーツケースは、その姿と重なります。

迎える側の变化

ブラウン家のお父さんは、はじめ「知らないクマ」を家に入れることに反対します。けれどパディントンを迎えることで、ばらばらだった家族の関係が変わっていきます。骨董品店のグルーバーさんも、かつて苦労してロンドンにやってきた移民でした。

💡 特集のまとめとして

共生とは、片方だけががまんすることではなく、**おたがいに変わっていくこと**なのかもしれません。特集の最終回として、『ワンダー』から『リトル・ダンサー』までの7本をふり返り、「ちがい」とともに生きるために大切なことを話し合う時間をとってください。

「居場所」をつくる4つの視点（板書用）（板書用）

① 事情を知る

なぜ、その人はここに来たのか。

② 不安を認める

迎える側の不安も、話し合えば小さくなる。

③ 良いところを見る

パディントンは、いつも人の良いところを見つけようとする。

④ おたがいに変わる

受け入れると、迎える側も変わっていく。

🎯 この授業の到達目標

よそから来た人を受け入れることの意味を説明でき、迎える側も変わる「共生」について、自分の言葉で考えを述べられる。

4 90分授業の流れ（45分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-8分	導入	「知らない場所に、ひとりで引っ越すとしたら、何が不安？」と問う。
8-15分	背景	地図でペルーとロンドンを確認。首の札とスーツケースの由来（作者の着想）を紹介。
15-45分	映画を観る①	駅でブラウン一家と出会う場面、家での騒動（クリップ）。
45-65分	映画を観る②	グルーバーさんの話、家族が変わっていく場面（クリップ）。
65-82分	ワーク記入	「居場所」をつくる視点と、特集8本のふり返りを書く。
82-90分	共有・まとめ	板書「ちがいは、いっしょに生きる力になる。」で特集を締める。

🌱 まとめ

パディントンは、家を失い、遠い国へやってきました。ブラウン一家は、はじめはとまどいながらも彼を迎え入れ、その中で自分たちも変わっていきました。特集「多様性と共生」の最後に、「ちがい」がわたしたちをどう変えるのかを、クラスで話し合ってください。

5 映画の背景知識

原題／邦題	Paddington / パディントン
製作年・国	2014年・イギリス（英国公開2014年11月）。上映95分。日本公開：2016年1月。映倫：G
監督・脚本	ポール・キング（続編『パディントン2』も担当）
原作	マイケル・ボンズ『くまのパディントン』（1958年）。ボンズは2017年に91歳で死去
日本語吹替	パディントン役は松坂桃李（初の洋画吹替）

主なキャストと役柄

- ベン・ウィショー（パディントンの声）：礼儀正しく、ちょっとドジなクマ。
- ヒュー・ボネヴィル／サリー・ホーキンス（ブラウン夫妻役）：心配性のお父さんと、心の広いお母さん。
- ジム・ブロードベント（グルーバー役）：骨董品店の店主。かつてロンドンにやってきた移民。
- ニコール・キッドマン（ミリセント役）：パディントンをねらう博物館の学芸員。

🍌 マーマレード

パディントンの大好物はマーマレード。帽子の中にも、いつもマーマレードのサンドイッチを入れています。「ペルーから来たクマの大好物」という設定も、異なる文化の出会いを感じさせます。

※上記の事実は公開情報（映画.com、CNN.co.jp、Wikipedia等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. ブラウン家のお父さんは、なぜはじめパディントンを受け入れることに反対したのだろう？

→ 迎える側の不安も自然な気持ちであることを認め、それがどう変わったかに注目させる。

Q. パディントンの首の札とスーツケースには、どんな歴史が重なっている？

→ 作者の着想（避難してきた子どもたち）を紹介し、物語と歴史をつなげる。

Q. 特集8本をふり返って、「ちがひ」とともに生きるために大切なことは？

→ 各作品のキーワードを板書し、自分の言葉でまとめさせる。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- よそから来た人を受け入れることの意味を、映画の場面を根拠に説明できているか。
- 迎える側の不安と変化の両方に目を向けられているか。
- 特集全体をふり返り、自分の考えをまとめられているか。
- 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する。特定の子どもに注目が集まらないよう配慮する。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	ワンダー 君は太陽	見た目のちがいと友だち	小学校高学年～
2	映画 聲の形	いじめと、向き合うこと	中学生～
3	ズートピア	偏見とステレオタイプ	小学生～
4	ドリーム	人種と性別の壁を越える	小学校高学年～
5	最強のふたり	障害と介助、対等な関係	中学生～
6	グリーンブック	差別と旅、友情	中学生～
7	リトル・ダンサー	「らしさ」の思い込み	小学校高学年～
8	パディントン	よそ者を受け入れる社会	小学生～

8 参考資料（主な出典）

パディントン 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

CNN.co.jp 「英作家マイケル・ボンド氏死去『くまのパディントン』」 <https://www.cnn.co.jp/showbiz/35103522.html>

Wikipedia 「パディントン (映画)」 [https://ja.wikipedia.org/wiki/パディントン_\(映画\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/パディントン_(映画))

作品：映画『パディントン』（2014年、監督ポール・キング）

© 2026 FilmEdu AI / 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。